

山のたより

毒にも薬にもならない
忘れかけてた

平成16年正月号 賀正

Vol.25

編集／発行 ☎ 652-0054 神戸市兵庫区氷室町 1-11-25 行守寺 きょうしん ☎ (078)511-9691 fax(078)515-2770

<http://www02.so-net.ne.jp/~jss/> e-mail kyoshin@da2.so-net.ne.jp

前号の24号を出したのは、私が宗務所長就任の年だったから、もう5年も前のこと。えっ？そんなに？

はいなあッ！

そりゃあ、言われるわ。

「お上人さん、息子さんがお帰りになって手伝ってくれてはるから、もう時間が取れるでしょう。『山のたより』出してくださいよ」高田さん

「おいッ、お前なあ、いつまで待たしてくれんねん『山のたより』。づーっと待ってんねんでえ」先輩の御守さん

最後のとどめは、最終兵器・劣化ウラン弾攻撃

「あなたッ！もう5年も経つのよ。みんな待ってはるやないの。今度の正月出さへんかったら、お酒吞ましてあげへんからね、絶対よッ！」飼い主
無条件降伏





タマ 久々の
登場!

その猫
凶暴につき……

タマと言っても二代目。
妻が夕餉の支度
している。足下
ではタマがウト
ウト。チャンス
到来。後ろか
らそーっ
と近づ
いて、
サッ
と

オモテ

抱き上げる。気配を感じて逃げようとしたが捕まってしまった。
こんなことでもしなければ、
ば、
なかなか
か抱かせて
くれない。
抱き上げた腕の
中でも、両手両足を
突っ張るし、噛みつくし、
逃げようとしてもがくし、
ホンマにもうッ!
いつも女房に説教され
ている。
「タマッ! あんたはねえ、
も少し考えなさいッ!

先代はねえ、抱いても、
ジーッとしてたし、膝
の上でも丸くなって
寝てたし、賢うーに
しとったんよ。
コリヤ、また囁
むッ。あんたが大人し
いのは、
眠たい
時だけやないのッ、
ホンマにあんたはゴ
ンタやねッ」
傍で聞いている私の方が、
先代と比較されて罵られ
ているように錯覚して、
恐縮してしまう。
ほんとに眠たい時だけ
なのだが、タマの寝相が
また……。小笠原流仕
込みと言うか何と言うか。
暑い夏は、冷たい廊下
の真ん中で、寒い冬は、
ホットカーペットの上で、
長あぐら伸びている。
廊下の真ん中で、う



ウラ



立教開宗の聖地・清澄寺

檀信徒の皆様
ご協力を戴き
ありがとうございます
お陰様で法要・事業
すべて円成しました
管長猊下に成り代わりまして

立教開宗七五〇年慶讃

日蓮宗

立教開宗七五〇年慶讃

日蓮宗

立教開宗七五〇年慶讃

日蓮宗

立教開宗七五〇年慶讃

日蓮宗

立教開宗七五〇年慶讃

日蓮宗

立教開宗七五〇年慶讃

日蓮宗



平成十三年十月。
清澄寺に於ける兵庫
県東部管区慶讃法要。
奥邸別当猊下より私
子を継承され、導師
を勤める。
身の引き締まる一日
であった。



管区大会ポスター

お釈迦様が説かれた教えは、膨大な量のお経として残っています。日蓮聖人は、それを全て読み研究された結果として、お釈迦様の教えの真髄は【法華経】に込められている事をつきとめられました。
日蓮聖人は七五〇年前、これからは、世界の平和のため、人々の安穩のため、法華経の教えを広めていこうと決意し、お釈迦様に誓い、この身命を賭した誓願の表明として、千葉県清澄山頂き旭ヶ森に立ち、遙か太平洋上に昇る旭日に向かって、初めて【南無妙法蓮華経】のお題目を唱えられました。
この時を日蓮宗の始まりと定め、平成十四年に、立教開宗七五〇年の佳年をお迎えしました。
この歴史的佳年を慶び讃え、世界平和のため人心安穩のため、更に法華経の教えを広めていこうと誓います。



当初、この芝生でガーデン挙式をしたいと言っていた。「そりゃ、いいな」と、風変わりの父親も乗り気。あれこれシュミレーションを進めるうちに、「こりゃムリだ」と断念。せめて写真だけでも芝生で…



東京出張の折り、修行中の息子に面会。大学卒業後の修行一年生。十代の先輩にアゴでこき使われ、いい人生修行。こうして、みっちり修行を積み、神戸に帰って、檀家参りに行っている。クックックと口に手をあて、「お上人さん、息子さんの方が、クックッ、いい声をして…」と、芦屋の高田さん。息子を誉められて悪い気はしないが…パパ苦笑い



修行出発前日、幼なじみの友が集まって断髪式

ねえ、たかクン、ホンマに行くん？あたりまえヤンケ！おいッ藤田、清水が行かれへんように、トラ刈りにせえや！そやな、ええな、清水の頭で遊ぼうや。しばらく清水と遊ばれへんからな。おいッ、お前ら！ひとの頭で遊ぶなやほんまや、なに言うてんの？あんたらあたしの大事なたかクンやのに…イタイ、イタイッ！お前いいからちゃんと刈れや。毛引っぱってるって…藤田、オレにもバリカン貸せやアカン！



華燭の典

2003.10.18

京都洛中
本山本法寺貫首
大塚日行猊下を式長に

「あれッ？仲人さんは？」
「……ないッ！」

花嫁さんは、明子さん。息子とは、小学中学と一緒だった。クラス会で互いの存在が気になり、その後急接近したと言う。
互いに結婚の意志を確認した後、息子は、東京の池上本門寺に修行のため行くことになった。
お寺に嫁ぐことになった明子さんは、その間、勤めの合間をみて、嫁さん修行。お寺の年中行事、宗務所会合の接待など、年中忙しいお寺の裏方の仕事に慣れるために、かいがいしく手伝いながら、孝彦の帰りを待っていた。



新夫婦と両親（後列左、清水家 右、藤田家）
「ハッハッハッ、お父さん一番小さいなあ、笑けるわ」末娘・章子が指さして、腹抱えて笑う。
写真上は、結婚式場。と言っても、行守寺の仮設プレハブ本堂。こうして見ると、なかなかすばらしい式場ですね。親族だけに限定しないで公開挙式に。式場後方には、新郎新婦の友人達も大勢。仏前結婚式と言うことで、興味津々。
厳粛で、華やかで、和やかな結婚式でした。「私も、兄ちゃんみたいに自分の家でやりたいわ」娘達の感想。皆さんも、どうぞ。

地球緑化 大作戦



ヒートアイランド対策

第一幕

一面、緑一色の芝生のガーデン、いいですねえ。地震で倒れた本堂の跡には碎石を敷き詰めている。「隣の芝生」がまぶしくてたまらない。造園屋さんに頼んだら喜んでやってくれるだろうが、そんな金は無い。加えて、極力出費を抑え、何でも自分の手でやりたい性分。貧乏性とも言う。ヨシッ、やるぞ！と意を決した。とは言え、何の知識も無い。

冬枯れする日本芝に比べ、年中青々としている西洋芝は、その魅力と、経済性、更にただ種を播くだけと言った手軽さが虜にする。「素人造園顛末記」には、西洋芝は日本の風土に合わず、高温多湿の夏場を乗り切れないので、ヤメトケ！って書いてあるのに、私もヤツテしまった。

年中青々としたゴルフ場の緑のジュータンを思い描き、そこに行守寺を重ねて、ニンマリ。



取りあえず、十畳ほどの広さ。本堂解体の時、解体屋さんが巨大な重機を持ち込み、更地にしたもんだから、地盤がカチンカチン。加えて、ちよつと掘ると、瓦、レンガ、ブロック、茶碗、水道パイプ、ほか弁の容器、木片、プラスチック片、ガ

ラクタが果てしなく出てくる。オレはいじわるじいさんかとボヤキながらウンボで掘り続けた。早く種蒔きしたくてたまらない。逸る気持ちを抑えながらも「こんなもんでイイか」とキリがないから大きなガラクタだけを取り除き、地ならしして種を播いた。毎日毎日水撒き。何日か経って、小さい芽が出

てきた。「ヤッター！」十分な水と太陽の恵みで、一面緑のジュータンができた。ほればれしていつまでも眺めている。インターネットには失敗談ばかり書いてるけど、みんななにやってんねん、簡単ジャン！芝刈りもまた楽し。

しかし、夏真っ盛りのギラギラと照りつける太陽の下では、少しでも水撒きの頻度が落ちると葉っぱの緑が落ちてくる。セッセと水撒きすればなんとか夏を越せそうだが、そのために大量のきれいな水を使うことが私にとっては許されない。たくさんの水を欲しが



を欲しが、肥料を欲しが、高温多湿を嫌う、思い通りになら

いよいよ終盤。最終行程の芝生貼り。生き物の芝生を何日もかけて、ダ

なかつたらすぐふてくされてしまう、こんな我が儘な西洋芝は許せない！すぐ西洋芝のライフラインを止めてしまった。

第二幕



完成記念撮影。清水教信開拓団長、武士正滋副団長（仏壇屋さん）。「みんな入ってよお、記念やから」「いやや！こんな格好で」ほんなら、名前だけ。森下すみえ（長崎のばあちゃん）、清水行子（毒）、堀てる子（妻友人）

ラダラとやっていたら枯れてしまう。一気にやってしまわなければなら無い。人手が要る。

第三幕

完成！自分の手で苦労して作った芝生苑だから、しっかりと地面に根を下ろすまで、異常な気遣い。それが高じて、看板をかけてしまった。



交友録 紳士

鈴木さん



異業種

あの人、どうしたのかなあ？近頃しばらく来てないけど……と頭をかすめながら土木作業をしていた。なにも真夏の炎天下にしなくてもいいものを、目にしみる滝のような汗を手拭いで拭きながらの作業がなぜか快感。面識のない男が二人訪ねて来た。

どうしても同業他社の紳士？との交友ばかりになってしまふ。早い話が、他寺のぼんさんとの繋がりがしかない狭い世界で、なんじゃかんじゃやっているのがある。

ひよんなことから、異業種の紳士と友達になった。ロータリークラブの話？それともライオンズクラブ？いやいや、ちよつと違う……かな？

鈴木さんは、いつも帽子をかぶっている。同年代で茶髪はオシヤレ。時々、腫れた顔してやって来る。

「すみません、兵庫署 縁つけられて、思わずナの者ですが、この男知っ イフ出したようなんですわ？」

「そうですか、あの人はい優しい人なんですけどね。」

「はあ、よう知つてますよ。いろいろ手伝つてくれて、助かってます。どうしました？」

「この男ねえ、このまえ新開地で、ナイフ出して人脅してますね。傷つけたりはしてないんですけど、通りすがりに因

題はないが、調書のウラを取りに来たと言う。

お寺さんで、いろいろ雑用させてもらつて、小遣いやらお酒を貰い、それに時々ご飯も食べさせてもらつてますと言っているが、それは事実かと言ひ確認。しかし、何月何日、一升瓶一本、など、こと細かく訊かれてもそこまで覚えていないわけがない。

「ご協力ありがとうございます。これで失礼します」と踵を返した。

「で、いつまで泊まることになるんですか？」

「そうですねえ、暫く泊まることになるでしょうね。」

「そうですか、それじゃ、真面目に勤めて早く来てくれるように。」

「去年の春先のこと、見知らぬ男が訪ねてきた。『ぼく、家に帰ろう思うねんけど、お寺さんの犬が付いてきて、離れへまっせ』

そのころゴンを放し飼いにしていた。朝放すと、夕方にはちゃんと小屋に帰って来ていたので心配



なかった。

夕方、また男がゴンを連れてきた。

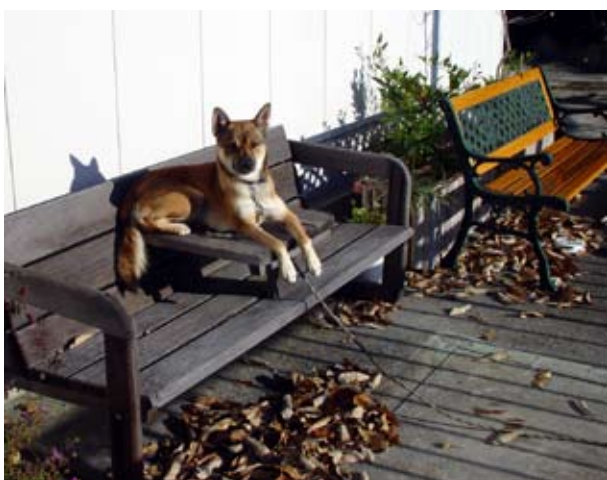
「小屋に入れとききました。この犬の名前なんて言うんですか？」

「ありがとう。ゴンです。ところで、ゴンは朝出たつきり、暗くなるまで帰ってこないけど、ずっとあなたと一緒にですか？」

玄関先で話していると、悪い人間ではなさそうだ。動物好きの人に、悪い人間はいないと言うことを鵜呑みにはできないが、逆に風体で推し量つてもいけないようだ。

鈴木と名乗るこの人は、鳶職だが、仕事が全くなくて毎日遊んでいると言ふ。水源地に毎日遊びに来るうちに、自由気ままに遊び廻っているゴンと親しくなった。

草むらで寄り添って昼寝したり、夏の暑さに、一緒に川に入つて泳いだり、ピツタリくついで日がな一日過ごしている。夜になって



も自分の小屋に帰ろうとしないゴンは、鈴木さんに怒られながらも、家まで追いかけて行ったことが、何度もあるらしい。車の往來が激しい市街地を抜け、大型トラックが疾走する2号線を横断しなければならぬのに、こんなことが心配で、ゴンを解放しなくなった。すると今度は、鈴木さんが来るようになった。犬の嗅覚は驚異的だ。

「クウーン、クウーン」

しきりに鼻を鳴らして、鈴木さんの気配を、視界に入る前に、遙か遠い距離から察知する。

玄関を開けて、

「住職さ〜ん、ゴンちゃん借りて行きま〜す」

そのうち、酒が好きだと言うから、一升瓶をあげたら、大変喜んでくれ

て、益々ゴンの世話をするようになった。

「住職さん、ボクねえ、ヒマやから何でもしますよ、言うてください」

雑用してもらつたり、土方の手伝いしてもらつたりしてみると、非常に丁寧。ご飯やら少ない小遣いでも、感謝してくれる。

そんな中、顔腫らして来る時もあった。

「鈴木さん、どうしたん？ そんな顔して」

「昨日、新開地歩いottaら、チンピラがいきなり殴りかかってきたから、ボクも殴りかえしたりしましたわ」

どうやら、兵庫署のお得意様らしい。

鈴木さん、兵庫署で結界壱百日修行中、ゴンのファンが相次いで訪れた。健康のために毎日水源

地散歩に訪れる大勢の市民にとつて、ゴンはマスコットの癒しの存在であつたことが解つた。だが、ゴンは鈴木さんと相思相愛。

独り占めしていた鈴木さんが修行中のため、ゴンは小屋で独りぼっち。全く見知らぬ人が訪ねてくる。

「お寺の犬、最近見かけませんけど、どうしたんですか？」

鈴木さんが修行中とも言えないから、朝夕の散歩だけと言うと

「ああ、元氣なんですか、安心しました。みんな心配してたんですよ」

「私たちが散歩させていいですか？」

「どうぞどうぞ。自由に連れてってください。ゴンも喜びますよ」

^{たいて}ひどかあー、普賢岳も

ばってん、
 がまだしとらす

パツと思ひ浮かぶだけでも、北海道奥尻島の大津波、雲仙普賢岳の大噴火、阪神大震災と自然災害があった。機会があつて、普賢岳大火砕流の跡に足を運んでみた。私たちが阪神間に居を構える者も大変な思いをしたが、普賢岳大噴火の災害も想像を絶する。

なかなか長 ことが推し量れる。「臨崎の生家に帰る 終のことを習うて他事を習うべし」か。

が、去年の十一月に、すぐ上の兄の嫁さんの一周忌で帰った。

兄弟が集まる時、いつもニコニコと輪の中にいたその義姉さんがいないのは「何か足りない」気がずつとつきまとう。伴侶を亡くした本人は、その比ではないであろう

と言う。そこに行くと、圧倒される。今までの普賢岳に更に百二十メートルも高いコブができたような「平成新山」は、溶岩が冷えたばかりのような荒々しい岩肌で、今にも襲いかかつて来そうに屹立している。

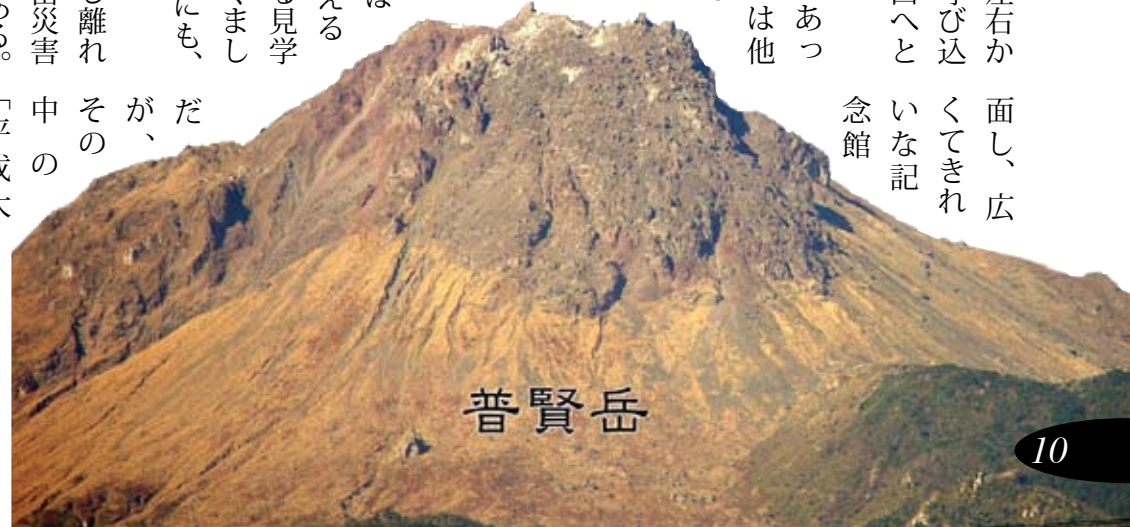
被災地の人達は、「がまだす」をキーワードにして、がまだしている。「がまだす」はその地方の方言で、「がんばる」「精を出す」という意味。水無川の跡には土石流で埋まった家屋が保存されている。ちょうど淡路・北淡町の野島断層保存館と同じで、当時の状況をそのまま永久保存して、見学コースの目玉になっている。ここもご多分にもれず、見学コースの順路

に沿って行くと、左右から土産物屋さんの呼び込みを受けながら出口へと向かう。

ちょうど休日とあって、広い駐車場には他府県からの車がぞくぞくと入ってき

て、関心の高さを物語っている。土石流で家を失い、田畑を失い、職を奪われた人達も生計を立てなければならぬことを考える

だ、その中、普賢岳「平成大噴火シアター」が圧巻。案内嬢が「ぜひともご覧下さい、お勧めです」と



普賢岳

言うので行ってみると、長蛇の列。

デイズニールランドはじめ、いかなる人気施設でも、いくら美人案内嬢の勧めでも、入場するためには並ぶようなことはしてはいけな

妊婦などへ、入場に関して注意のアナウンスしている。「またあー、お

げさなこと言うて」などとツツコミでもしてないと間がもたない。やっと順番が来てシアター内に入ると、椅子は無いが、その代わりに、両手でしっかりと掴むように頑丈な鉄パイプがある。足を少し開いてしっかりと張り、両手でしっかりと鉄パイプを握って観る

ない。全員が鉄のバーをしっかりと握って、足を踏ん張って立っている。眼前には、直径14mのドーム型スクリーンが覆い

被さるように広がっている。つつじの春、紅葉の秋、一面雪景色と霧氷の冬。四季折々の雲仙を、ゆっくりとした超低空の飛行機から満喫できる映像。特殊なスクリーンのせいだろうか、ほんとに飛行機に乗っているように錯覚してしまう。

見、水蒸気噴出の激化、溶岩の噴出、溶岩ドームの隆起、大噴火、戦慄の火砕流、怒濤の土石流、なるほど、心臓の悪い人には危険だ。

普賢岳の上空付近を飛んでいて、いきなり大噴火。その衝撃で、飛行機も危険な状態。その上、巨大な岩石が飛行機に向かってビュンビュン飛んでくると、もう生き



た心地がしない。また、水無川上流にいと、けたたましいサイレン。



保存してある、埋まった家屋

のが、この映画館の鑑賞作法「がまだす流」らしい。作法通りの鑑賞態勢がしっかりと準備できているか女性係員が一人一人チェックして廻る。すり鉢状の観客席には、階段があるだけで、椅子が

普賢岳の上空を遊覧していて、山腹付近にちよつとした水蒸気の噴出を発見することから始まる。真っ赤な溶岩の発

「逃げるーッ！火砕流だ」一瞬にして一つの集落を呑み込むほどの巨大な火砕流は、立木、家屋、家畜、車、全てを瞬時に焼き尽くしながら、一秒間に百メートルと言う驚異

梅雨の長雨で、土石流が発生した。濁流と一緒に猛烈な早さで迫ってくる、幾つもの巨大な石が、スクリーンを突き破って来るようだ。災害の恐怖を疑似体験することがで

サッカーなんか見向きもしなかったが、さすがにワールドカップは気になった。と言うより、日本が勝ったか負けたか、だけでよかった。

決勝進出を賭けた日本チュニジア戦。ちょうど女房と車で移動中だったのでカーラジオを聴いていた。アナウンサーが、稲本がどうのこのの、中田ヒデがなんやかんや言っているなかで、「日本の遠藤が……」



言っている。
「なあ、遠藤だ
藤って言うことは、チュニジアにもエンドーて言う選手がおるんやるか？」

「日本の選手にも、遠藤ておらへんで」
「言うてるやんか、遠藤で。ちゃんと聴いてみいや」
ラジオなのに、しつかり凝視しながら聴いている。

「ほんまやなあ、言うてるわ。
他の選手には“日本の”って言うてないわ」

「そやろ？ほんなら、エンドー
て、なんや？」

「知らん……」

古い話

あれはいったい、
何だったんだ？

あの 鈴木さん part 2

ほぼ完成して、印刷屋に回そうかと言う頃になって、鈴木さんがネタを追加提供してくれた。

「住職さん、助けて！」

ケイタイの悲痛な叫びを聞いてみると、誰か身柄引取に来てくれないと、生田警察署から出られないと言う。「またか、何やったん？」

図書館で入館の順番待ちでしゃがんでいた。そこへ、後から来た老婦人が彼を跨いで先に行った。「コラッ！ババア。ちゃんと順番守

らんかいッ！」と持っていた傘で突つついた。怖くなった老婦人は警察に連絡。

駆けつけた二人の警官と取っ組み合いをしたあげく、ねじ伏せられ、御用となった。出所時の警官と鈴木さんの会話。住職さんが迎えに来てくれはったから、と彼を諭しながら

「お前、力強いなあ」

「いやあ、やっぱポリさんの方が強いわ、柔道やってはるから」頭ポリポリ。

この男、ルール違反に過剰反応するようだ。

編集室のゴミ箱

■ほぼ誌面が埋まって、このコーナーを書く時がいちばんホツとする。やっと終わったと言う安堵感かなあ。

■発行がお寺さんやから言うて、仏様の教えとか期待しないで下さい。内容が無いとご不満の方は、反古にして下さい。強いて言うなら、文底秘沈……かな？

■管内のお寺さんみんな、毎年、新年交歓会をするんですけど、その時、「坊さん川柳」を持ち寄って遊ぶんですよ。去年の私の作

【テポドンに 備えるセコム してますか？】

どうです？自信作でしたけど、参加賞……トホホ
■冬の夕食がいい。いつもラジオを聴きながらだけど、夏はアカン！、どこの局も野球ばかり腹たつてくる。冬は、焼酎とおでんとくると、ぜったい演歌、これ定番。「これは定説です」高橋。

■あ、忘れてました。11ページの書き残し「きる」でした。まだ続けようと思ったけど、やめた。

■なんの脈絡もない、支離滅裂の内容ですが、こは、いいんです、コレで。

■今度はいつ出せるかなあ？せいぜい尻たたいてくれはったら、その気になるでしょう。